

インクルーシブ教育のための教育対話学による学際的越境

企画者・司会者 荒巻 恵子（帝京大学大学院教職研究科）
話題提供者 司城紀代美（宇都宮大学）
池田 彩乃（山形大学）
指定討論者 TRIGO-CLAPÉS Ana Laura（ケンブリッジ大学）
楠見 友輔（立教大学／日本学術振興会特別研究員 PD）
通訳 香川奈緒美（島根大学）

KEY WORDS: インクルーシブ教育学 教育対話 T-SEDA

【企画趣旨】

英国でインクルーシブ教育を推進する Florian (2015) は、経済至上主義は、高度な学術的標準での国際競争を生み、多くの国々の教育は、競争社会に打ち勝つ人材育成を目標に掲げたカリキュラムや学力調査によって運用される教育制度に本質的な問題があると指摘している。さらに、民族、文化、言語、障害、貧困など児童生徒の状態像への学校の対応は、従来にも増して多様であり、不公平であることを危惧している。多様性への課題に生徒間の個人差の問題として対応することは、ベルカーブ構造から抽出された学力の範囲内で実践しようとする学校教育であれば自明のことであるが、問題解決のためには、区別された教育（exclusive education）か、インクルーシブ教育かの二極に捉われるばかりでなく、その実際や背景にも注目して、インクルーシブ教育について学びなおしをすることを主張し、特に教員養成段階からインクルーシブの概念やインクルーシブ実践を学ぶことの必要性を指摘した「インクルーシブ教育学」を提唱している (Florian 2010)。

一方、「教育対話学」は、対話学から発展してきた学問でソクラテス問答法や禅問答法など対話的教授法研究や民族、文化、言語、貧困など、個々の子どもの状態の多様性にアプローチした教育比較研究、近年では教師の対話教育の専門性にも焦点を当てた研究を進めている。英国ケンブリッジ大学の Sara Hennessy, Ruth Kershner らは、通常の教室を対象に、教師がすべての子どもの学習を実現するために、教師と生徒の間の教室内の談話や、教室内の多様性に着目した研究、また、自閉症児のコミュニケーションスキルの開発に関する実践的な研究 (Ana Trigo Clapes) を行うなど、インクルーシブ教育への貢献もある。さらに、ケンブリッジ大学教育対話研究グループ (Cambridge University of Educational Dialogue Research Team; 以下 CEDiR) は 10 カ国で 300 人以上の教師を対象に「Teacher Scheme for Educational Dialogue Analysis (T-SEDA)」と呼ばれる教師の専門性開発のための教育対話探究サイクルと教育対話分析法を開発し、教員育成教材を提供している。この T-SEDA は、現在、中国語、スペイン語、フランス語、ヘブライ語に翻訳され、活用されている。国境を越えた時代の中で、教室内にある多様性を認識した対話の醸成に、「教育対話学」の貢献が期待される。

わが国では、荒巻、司城、池田らが 2021 年より国際共同研究に参加し、T-SEDA の日本語版として「教育対話のためのガイドブック—教師編—」邦訳を公表し、我が国のインクルーシブ教育における教育対話研究を進める。

そこで本シンポジウムでは、インクルーシブ教育への教育対話学の学際的越境について、具体的な実践を紹介しながらインクルーシブ教育における教育対話の可能性を、インクルーシブ教育と教育対話学の研究者に語ってもらう。

【話題提供者の趣旨】

話題提供 1 では、通常の学級における教室談話研究を紹介し、インクルーシブ教育との関係について考える。多様な子どもたちが学習する教室では、教師の予期せぬ発言やお互いに容易には理解しえない発言が生じ、教師と子どもたちの様々な思考や発言の様式が複雑に交錯する。一見対話の困難性ともとらえられるこの過程を肯定的に意味づけることにより、インクルーシブ教育における対話について考察したい。(司城紀代美)

話題提供 2 では、インクルーシブ教育における教育対話について考究する。考究には、単に場を共有するだけではなく、個々の児童生徒の実態に応じた対話の在り方を模索する必要がある。特に肢体不自由児においては、発語の明瞭性や語彙の増加等のみならず、運動発達や他者との関係性との関連も含めた幅広い知見が必要である。話題提供 2 においては、重度・重複障害児に対する言葉の指導の段階性に関する実践を紹介する。(池田 彩乃)

【指定討論者の趣旨】

TRIGO-CLAPÉS (2021) は、インクルーシブ教育の実践に向けた、自閉症生徒との教育対話を使った授業への取組を行った。T-SEDA で開発された対話の探究サイクルによるもので、教育対話コード分類表を使った自閉症生徒の対話の内容や構造を診断し、自閉症生徒が授業に参加するために、①期待されていることが何かを理解させること、②視覚的・身体的表現を取り入れ、明示すること、③情報をステップに分けること、④選択肢を提供すること、⑤仲間との対話を仲介すること、⑥1 対 1 のサポートを提供することという 6 つの工夫の提案、のほか、教室の物理的な環境設定やさまざまな形での参加の機会を提供し、より親しみやすい活動の改善計画が提案された。日本におけるインクルーシブ教育の実践に、T-SEDA の可能性はあるだろうか。(TRIGO-CLAPÉS Ana Laura)

楠見 (2022) は、インクルーシブ教育を教育制度改革と捉えた場合に、「教育の場」「教育の内容」「教育の効果」の 3 つの観点からの議論が必要であることを指摘している。我が国においては「教育の場」に関する議論は盛んであるが、他の観点からの議論は殆どなされていない。この点で、T-SEDA の受容は、日本のインクルーシブ教育を教育の内容や効果の観点から語り直す可能性を持っているかもしれない。T-SEDA による授業の分析は、上述した 3 つの観点からどのようにインクルーシブ教育の実現に向けた教育改革に貢献するのかを問いたい。(楠見 友輔)

〈謝辞〉本研究は、文部省科学研究費助成事業基盤研究 (C) 2020-2023, 20K02976 の助成を受けたものです。(ARAMAKI Keiko, SHIJO Kiyomi, IKEDA Ayano, TRIGO-CLAPÉS Ana Laura, KUSUMI Yusuke, KAGAWA Naomi)